

装置を出品し意表に出た人である、工藝美術家には珍らしい能働的な人で絶えず新らしい意慾に新らしい研究と製作を示し支那の大陸性に應じては又よくその本質を探索新らしい動機と發展を極めることだらうと期待される、目下今年度帝展出品のために純日本式室内装置の製作中で完成は入後本月十日頃赴任の途に上るさうである

齋藤氏は語る『今度私が突然圖案部主任となつてゆく支那國立藝術院大學は一昨年創立で支那の美術界では最高權威で、圖案部はこの九月から開かれたのです 現在支那には新しい形式による西洋の圖案に關して適當な人が居ないので我國から招聘することになつたのでせうが國民政府になつてから私が始めてですから少し氣味が悪いのですが、折角ゆくのですから私の知つて居ることは全部支那の人々に傳へたいと思つて居ります』

齋藤は一年間滞在の予定で十月二十日に中國へ向けて出発した。彼は翌五年末に歸国するが、その年の六、七月には國立藝術院の芸術教育・文化視察団の一員として一時歸国した。この視察団は芸術院長林風眠、林文鏞、蔡威廉（蔡元培の娘）、潘大樹、李樹花、李鳳白、王子雲、齋藤佳三および通訳官凱慰宸らから成り、外務省対支文化事業部と大阪毎日新聞社の後援の下に來日したもので、六月二十九日神戸着、三十日東京、七月八日から十日間、東京府美術館で同院教授らの作品展を開いた。これについては『東京美術学校校友会月報』第二十九卷第四号も次のように報じている。

中華民國々立西湖藝展 七月八日より十七日まで、東京府美術館に於て開催、齋藤佳三氏の盡力により烏叔養、李朴園、房品章、陳盛鋒、劉文如、趙人馨、李風白、李超士、王子雲、林風眠、王靜遠、吳大羽、蔡威廉、潘天授、齊白石、王子雲等諸氏の油繪、水彩、バステル、國畫、及び彫刻等百二十點を展觀せり、尙別室に於て中華農民手工藝品及大衆文具を即賣したり。

#### ⑦ 昭和初期の鑄造科

清水巖氏（昭和六年鑄造科卒）の了解を得て、氏の「鑄金閑話」『萌芽』三三六号、三三四号、昭和五十七年十一月、五十八年九月）を要約して掲載する。

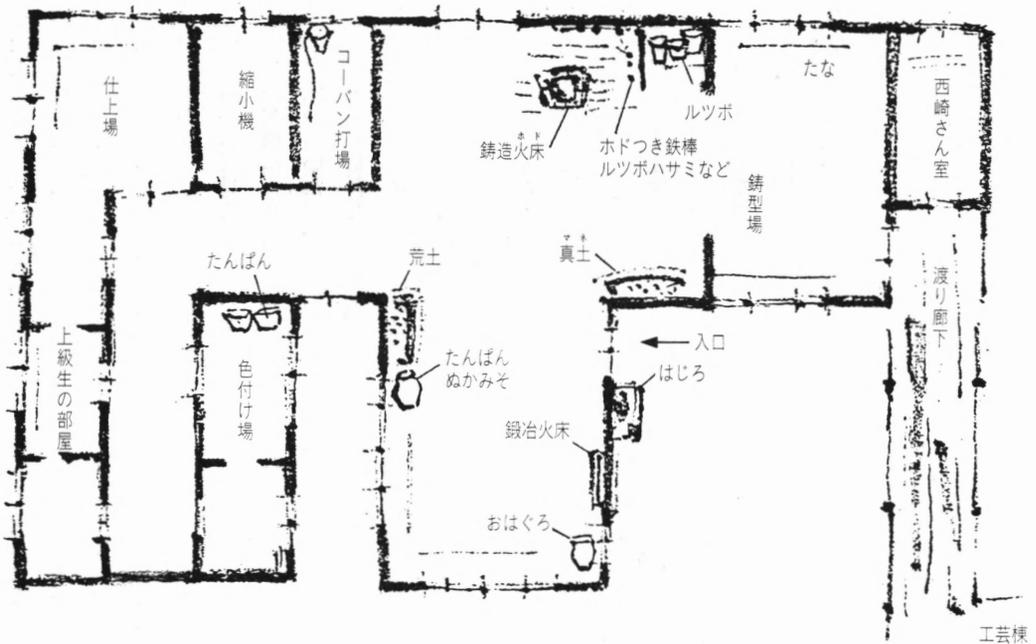
学校の門を入ると守衛所があつて、表は黒字、裏は赤字の名前を書いた木札が建物の壁に掛けてあり、学生は登校時に表を出し、下校時に裏返しする。先生の木札は小形で守衛の机の上にあつて守衛が操作した。今の音楽部のところが木造二階建の工芸部で、二階は図案科と漆工科、一階は鑄造科と鍍金科と彫金科だった。鑄造科の教室の裏手に別棟で鑄造場があつて、土手の植込垣根までのびていた。

大島如雲先生は蠟型鑄造の大家で、蜜蠟で原型を造る名人だった。それに鑄物土をかぶせ、乾燥後に蠟を溶かした空洞に熔融した金屬を注入して鑄造する。これは驚の足、鷹の足、雀の足と蜜蠟でまたたくまに造つて、造り方を教えられた。洋服姿は見たことがなく、いつも折り目正しく着物を着ていた。着流しで来ると、守衛所

で袴をつけて校舎に入った。学校に来る時は二人びきの人力車に乗って来て、門を入った守衛所の前で降りる。校門に近づくと勢いよくやれっというんで、綱引きの車夫が「エイヤー」の掛声で駆け込んでくる。エイヤーの掛声賃がでるので威勢がよかった。大島さんは食通で、特にてんぶらが好きだった。「湯島に上る途中に、ころもは軽く、エビのでかい、てんぶらがやがある、ここの店はいいね。なんでも油であげりゃあてんぶらだと思っちゃいけねえよ、ものを造るんだって同じさ、ただつくればいいというもんじゃねえよなあ、雀に鶯の足をくっつけて雀でございはいけねえよ、本物を造るんだなあ」。大島さんは「私は江戸っ子でねえ」とよく言っていて、話はこのなふうだった。「江戸っ子はね、海苔を張りあわせて羽織をこせえるだな。粋の店に上<sup>マ</sup>から着るんだよ。ちぎ<sup>ぎ</sup>って火鉢にあぶりながら酒の肴にするんだって、粋なもんだよ、わかるかね、遊ぶんでも、物を造るんでも粋じゃなきゃいけねえよ、それにヤ工夫が必要だよ、年中同じことじゃねえ野暮くていけねえなあ」。

塑造の沼田一雅先生は、コールテンの長い上衣に縞ズボンの洋服で、マドロスパイプをくわえ、太いステッキを小脇にかかえて颯爽としていた。塑造室に入って教室を一巡するとき、言葉をかければいろいろと説明してくれて、ときには手をだして直しはじめるが、黙っていれば素通りだった。資料館近くの正木校長の陶彫像や校庭の津田信夫のブロンズ胸像は沼田さんの作だ。また動物を造るのも有名だった。

久米桂一郎先生は、西洋画と美術解剖学の先生で、デッサンを習った。随分ハイカラだったが、洋服姿は見たことがない。いつも髪



工芸棟

鑄物場の略図（昭和初期）

（『萌春』第326号より転載。一部西大由氏のご教示により書き加えた。）

を七・三にびたつと分けて、一糸乱れず、縫文の羽織袴に白足袋というまったく端正な姿だった。長身の好男子で威厳があった。出席簿を持った西田正秋さんを連れてデッサン室にくる。その時間は正確で、学生の遅刻には厳しかった。遅刻すると「君、でたまえ」で教室に入れない。ある時、木炭画に使う布を忘れて学帽で画面の木炭を払ったりたたいたりしていたら「君、デッサンを侮辱するのさ」と叱られた。静かに語りかけるような口調なのでそれにはまいった。私の画はどうみても下手で、先生の目の届かない後ろに席をさがすようになったら、石膏像はノッペラボウで光と影だけに見えた。そんな時にかぎって先生が私の席に来て、運が悪いなあ、一発くるかなあ、今日で終りかなあ、そんな思いでいた。ところがある時、「君、その描き方だ、見方だ、それがいいんだ」と言われ、先生は人の画は直さないのだが、それからは私の画を直してくれて、期末のコンクールでは採点順に全員のデッサンが廊下に張り出され、私はトップだった。一寸のきっかけから自信がつくものだ。久米さんは精神を鍛えて教える厳しい先生だった。

先生たちが製作するのを見て覚えることは多かった。津田信夫先生が現在の国会議事堂の表玄関の大扉を造ったが、学校の鋳造場の隣にあった別棟が仕事場だった。時々覗きに行くと、大物造りを目で見て製作法を知った。鋳造は鋳物と仕上げと色つけの技術がもとで、ブロンズの大扉は仕上げが実に丹念だった。小諸懐古園の「藤村詩碑」の原型を高村豊周先生が学校の原型室で、蜜蠟で一字、一字、小諸なる古城の……の歌の文字を造った。それを見ていて、文字の厚み、つくり方、まとめ方を覚えた。後に横浜の高等学校の大

きな校歌碑を蠟型鋳造で私が造った時、学生時代に見て覚えたことが役に立ったと思う。杉田禾堂先生が鋳銅の「構成面形の花瓶」を造った時、その色付けを鋳金場の色付け室でやっていた。キサゲ仕上（本仕上）した花瓶の表面を炭研ぎして、それから大根おろしをタップリぬりつけては洗い、ぬりつけては洗い、これの連続で、そのつどすかして見ては表面を調べていた。これでよしというところでタンパン槽に入れてすばやく引上げ、青緑色がかかった半透明の感じの色がついた。一寸した手指があれば色は斑になる。大根おろしは脂とりの材料だった。坂口先生が学校の鋳造場で、東京医科大学専門学校の一メートル位の時鐘を造った。原型が出来上って、鋳型もすんで型焼がはじまった。火床ヒトは火が燃えさかって、今日は「吹き」だなあと誰しもわかるとみな頼まれなくても手伝う。湯（金属の熔解したもの）も冴えてきて型焼もよしの頃合をみて湯を板に流し出した。「早く荒土を団子にして、たたきつけろ、荒土を板にのせてなすりつけろ」の先生の声で、すぐさまその通りやった。それで流出は止まったが、そんな大声は初めてだった。そのあといつものことで、いつ誰が頼んだかわからないモリソバがきて、先生も私たちも黙々と食べて帰った。こうして体験から学んだものはこの上もない大きなものをつくづく思う。

坂口脛先生は、津田信夫先生の二年先輩で、香取秀真先生の一年先輩、鋳金技術の名手で、円顔に鼻下に髭をたくわえて恰幅がよく口数が少なかった。当時の先生は聞かなければ教えてくれず聞かれれば教えるというやり方だったが、坂口さんは口より手が先で、聞

けばすぐ来て直したり、造ったり、一緒になってやってくれた。鑄造技術は理論外のコツがあるから仕事の中から覚えた。坂口さんはいつも鑄造場において黙々と自分の仕事をしていて。人と喋っているところは見たことがない。展覧会に出品したり、美術団体に入ったり一切しなかった。学生たちは尊敬していた。愛称はドンちゃん、温情の深い先生だった。

上野の山は、日が暮れると長い棒を肩にした人が来て一つ一つガス灯をともして行く。森がガス灯で青白くにぶい光になると、美校生たちは山から下りて街へ繰り出した。屋根の上に大きな瓢をのせた堂々たる店構えの割烹店「東仙閣」で、私たちの新入生歓迎会をしてくれた。その顔ぶれは、津田信夫、沼田一雅、坂口脛、杉田末堂、高村豊周の諸先生と、学生は十三人の上級生に三人の新入生だった。それはびっくりするような豪華な会で料理にお銚子が並び、芸者が大勢きた。こういう席は生れて初めて出くわしたので、身のおきどころがなく、戸惑うばかり、上級生の唄や踊りに入れず芸者の酌は受けられず、緊張しっぱなしだった。先生は悠然と芸者相手によろしくやっていた。カフェー「新世界」は大きな西洋風の店で行った。その頃は気風のいい美形の女給さんが大勢いて、美校生を大事にしてくれた。

美校生の唄と踊りは天下御免だったが、銀座の資生堂角の交番では大目玉をいただいた。銀座方面になると通用しなかった。彫刻の石井鶴三の学生時代「明治三十八年〜四十三年」に相撲が非常に強くて、美校が学生相撲の雄となった。学生相撲大会の会場は両国の国技館で、応援団の奇想天外の有名な応援がされた。各自勝手に仮

装に扮した集団が、突如奇声を発し綱にぶらさがって注目を集め、得意の唄と踊りが始まる。そしてそのあとに必ず「負けてやーれ、負けてやーれ、負けてやーれ」の合唱が何回も続いた。

#### ⑧ 『美術研究』

昭和四年二月、校友会文芸部より『美術研究』が創刊された。『東京美術学校校友会月報』第二十八卷第二号の「文芸部記事」には『美術研究』編集部より」と題して岡田秀雄がその紹介記事を寄せており、冒頭に次のように記している。

演劇部、圖書部、近代藝術研究部の三部の提唱の下に畫策され、その創刊號を前學期末に至つて漸く出す事の出來た『美術研究』は、其後、文藝部内の映畫部及びエスペラント部の加入に依つて、茲に第四號は五部共同の研究發表機關として諸君の前に送り出される事になりました。五部の機關紙とは言へ、同人雜誌と類を異にするこの『美術研究』は、決して、一部の愛好家の意志を代表し、或は少數の生徒の言論の機關として存在するものではなく、實に新しい美校の精神と元氣潑刺たる全校生徒の抱負を反映しつゝあるものと言はなければなりません。でありますから、この雜誌には、新時代の美術に對する吾々の悦び、不安、疑惑、懊惱。あらゆるものがその中に包括せられねばなりません。

この雜誌は文芸部の生徒が自主的に発行したものであり、また、当時一般の学生の間で盛んであった左翼思想と関連があった点で、